妙の光（たえのひかり）

通刊69号 **復刊48号**
2004年11月27日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256―77―2025

青げら

一般的に啄木鳥（きつつき）と呼ばれる仲間で、薄緑色の体に頭の赤い模様が特徴的ですぐわかる。開け放した本堂に入り込んで出られなくなり、ガラスにぶつかって脳震盪を起こし一時的に気絶。院庭でしばらく休んでいる姿を撮った。

この欄で紹介するのは二度目で、なぜか前回も同じ季節だった。ふだんは針葉樹の林に生息するが、晩秋から冬にかけて市街地の庭にもよく飛んでくると図鑑にある。そのせいで迷い込んでくるのがいつもいまの時季なのか、この秋も二回あった。

山が近いから初夏に木をつつく音が盛んに聞こえる。古い羽目板を突いてるときは響いて、道路工事現場のようなドドド・・・という驚くほど大きな音がする。でもケケケケと鳴く声は里に増えるせいか晩秋のイメージが強い。歌に詠まれるのも秋が多いそうだ。

啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々　木原秋櫻子
啄木鳥や落葉の上の日しづか　伊藤　柏翠

「千の風になって」と墓

小川英爾

「千の風になって」という詩をご存知だろうか。去年八月『朝日新聞』の「天声人語」の欄で紹介されたのがきっかけでたくさんの人の共感を呼び、一躍日本中に広まった。新聞によると「だれつくったのかわからない一遍の短い詩が欧米や日本で静かに広がっている。愛する人を亡くした人が読んで涙し、また慰めを得る。そんな詩である。／英国では九五年、BBCが放送して大きな反響を呼んだ。アイルランド共和軍（IRA）のテロで亡くなった二四歳の青年が「ぼくが死んだときに開封してください」と両親に託していた封筒に、その詩が残されていた。／米国では去年の九月十一日、前年の同時多発テロで亡くなった父親をしのんで十一歳の少女が朗読した。米紙によるとすでに七七年、映画監督ハワード・ホークスの葬儀で俳優のジョン・ウェインが朗読したという。八七年、女優マリリン・モンローの二五回忌にも朗読されたらしい。」

（天声人語、平成十五年八月二八日付より抜粋）

ひろまったきっかけは作家で新潟市出身の新井満さんが、友人の追悼文集にあったこの詩に音楽をつけたことだったそうだ。新井さんの書かれたものによると、新井さんの幼なじみで川上耕さんという弁護士が新潟市にいて、その奥さんがガンにかかって四八歳の若さでご主人と三人のお子さんを残してあっという間に亡くなってしまった。家族の驚きと悲しみは大きく、新井さんは慰めの言葉以外、力になれることは何もなかったという。この奥さんが農業、食物、環境、教育、平和といったさまざまな分野で〝いのちを守ろう〟と呼びかける社会活動のリーダーだったことから、彼女を慕う多くの仲間たちが寄稿して追悼文集が作られ、その中に紹介されていたこの詩に新井さんの目が釘付けになった。そのとき「私は一読して心底から感動しました。〈よし、これを歌にしてみよう。そうすれば、川上君や子供たちや、あとに残された多くの仲間たちの心をほんの少しくらいはいやすことができるのではないだろうか・・・〉そう思ったのです。」そこで新井さんは何ヶ月もかけて元になる英語の詩をさがし出し、

翻訳して曲をつけて歌にして個人的なCDを数枚だけつくって川上さんに送った。これが奥さんを偲ぶ会で披露され、集まったひとたちが一様に涙しながら歌ったのだという。

千の風になって（訳詩・新井満）

私のお墓の前で　泣かないでください
そこに私はいません　眠ってなんかいません
千の風に
千の風になって
あの大きな空を吹きわたっています

秋には光になって　畑にふりそそぐ
冬にはダイヤのように　きらめく雪になる
朝は鳥になって　あなたを目覚めさせる
夜は星になって　あなたを見守る

私のお墓の前で　泣かないでください
そこに私はいません　死んでなんかいません
千の風に
千の風になって
あの大きな空を
吹きわたっています

千の風に
千の風になって
あの大きな空を
吹きわたっています
あの大きな空を
吹きわたっています

人知れずこの詩が広まっていると言う話を何かで私が耳にしたのは、去年の春だったように記憶している。そして実際の文章を目にしたのが同じ七月の下旬、地元巻町の葬儀屋さんとの雑談の席だった。「いまこういう詩があって、ある葬儀でも読まれましたよ」と言ってコピーを差し出された。一読して何か心にジーンと響くものがあった。爽やかで心がはればれして、それでいて亡き人としっかり結び合った暖かさが溢れている。大切な方を亡くしたひとが元気を取り戻せる、そんなすごい詩だと正直に思った。

しかし、その場の相手が葬儀屋さんだったせいか「でもさ、〈お墓の前で泣かないで、そこには私はいません〉て、墓参りを勧めたり、墓の前でお経を読んでるお寺にとってはまずいことではないか？」と、隠れた本音というか、素朴なひっかかりととでもいうか、今にして思えばつまらないことをつい口にしてしまった。葬儀屋さんは「ウーン」とうなって腕組みをして、

何も言わなかった。以来、気持ちとしては理解する一方で、日ごろの自分自身の言動との不一致になんとなく気持ちが悪いま月日が過ぎていった。

そんなある日、安穏廟を求めたお一人が墓碑に刻む文字の原稿を持ってこられたが、そこに〝千の風〟と書いてあったのだ。「〝千の風になって〟の詩がとっても気に入って、ぜひこれにしたいんです。いいですよね？」と仰る。もちろん問題はない。いま「杜の安穏」の墓碑に味わいのある横書きの文字で刻まれ、とてもいい感じで他の墓碑とともに緑のアキニレノの木のもと静かにたたずんでいる。

そして先般十月、「三重塔落慶法要」に招いた佐渡の「鼓童」の一員に、笛の名手と言われる山口さんがおられた。ベテランメンバーのひとりで先ごろまで代表も務めていたが、多忙で自分の演奏ができないからその職は辞められたという。笛以外にも胡弓、箏、三味線の演奏の他、舞台演出や作曲も担当。とはいってもとても気さくな人柄で、演奏の前夜妙光寺の台所で深夜まで酒を飲みながら語り合い、興に乗ってその場で笛を吹いてもらった。目の前で聴く笛の音色はそれはそれはすばらしく、まさに至福のひとときだった。この山口さんと数日後に滋賀県の彦根で再会したのだが、そのとき思いがけないことを言われた。「妙光寺での演奏も泊めていただいたのも最高に楽しかった。ぜひまた演りたいです。ところであの朝境内を散歩して安穏廟まで行って感激したんですが、〝千の風〟と刻んだ墓碑がありましたよね。僕もあの詩が大好きで、あの詩のイメージと妙光寺の風景がぴったりなんです。実は来週佐渡で新井満さんと仕事でご一緒するんでこのことをお話ししようと思ってます。新井さん喜ぶだろうな。」

え、また〝千の風〟の話、と驚いた。その前の九月、近くの寺に婿入りする甥（私の姉の次男）の結婚式でのこと。出席された義兄の友人で長崎県のご住職が披露宴会場で私に「どうしても妙光寺さんへのお参りと安穏廟を見学したかったんで、お留守を承知でさっきお邪魔してきたよ。なかに〝千の風〟と書いた墓碑があってとても嬉しかった」と話しかけてきたのだ。賑やかな宴会場ではお礼を言うのがやっとで、嬉しかった理由を聞くことはできなかった。

こうなると私自身のなかできちんと整理しなければならい。そう思ったときにはっと気がついた。お経の「もし仏　久しく　この世に住せば薄徳の人は　善根を種えず　貧窮下賤にして　五欲に貧著し　厭怠をいだき　恭敬を生ぜず　されば衆生を度わんとて　方便して涅槃を現ず（法華経・如来寿量品第十六）」の一説だ。わかりやすく言うと、もし私（お釈迦様）が永久にこの世に居続けると人々はいつでも助けてもらえると

思い込み、良い行いのために努力せず、貧しさからさまざまな欲望に心が奪われ、怠け心から敬いの気持ちを失くしてしまう。だから私（お釈迦様）は仮の姿として死ぬんであって、実際にはいつもあなた方の傍らに居て、求めればいつでも救いの手をさしのべる、という意味になる。姿かたちは見えなくなっても心はいつもあなたのそばにいます、決して死んでしまったのではないのです。だから嘆き悲しまないで、元気にしっかりと生きてください、とお釈迦様が説かれているのだ。

ここに気がついたら色々目に入ってきた。私が尊敬しご指導いただいた身延山久遠寺の岩間前法主様の本には、「死の悲しみに眼を開く」と題して前述のお経文が引用され、続いて「死の悲しみに眼を開き／正しき道に勤めれば、敬慕（けいぼ）の人滅っせずに／我が傍（かたわ）らに在（あ）るを知る」と添えられていた。さらに最近有名になった昭和初期の童謡詩人〝金子みすず〟の作品にこんな詩があった。「かいこはまゆに　はいります／きゅうくつそうな　あのまゆへ／けれどもかいこは　うれしそう。人はおはかへはいります　くらいさみしい　あのはかへ／そしていい子は　はねがはえ／天使になって　とべるのよ」

この金子みすずの詩もあの「千の風になって」も、また引用したお経文も岩間前法主様が添えられた文章も、人の命は限りあるものではなく終わりのない永遠に繋がっているものだと言っている。風や光や星、あるいは天使や仏さま、さまざまな形ではあるが生まれ変わり私たちを見守っていてくれる。泣き崩れてばかりいないで前向きに生きて見守りを実感し、明るく多くの人たちとの関わりを大切に生きていこうと。それぞれの詩や文書が土地と時代を超えて多くの人たちの共感を得ているのは、ともに〝生きる勇気〟を伝えているからではないか。

しかし現実はさまざまな人間関係に心煩わされ、雑務に忙殺される日常生活がある。そこでときには足を運んで心を鎮め、改めて見守れていることを実感し感謝の思いを抱く、その拠り所が墓ではないか。それを墓の形だ向きだお参りの時期だ、あげくに障りだたたりだ等々、世間で言うのはまったくの迷信に過ぎない。こうした因習にこだわったり、いつまでも悲しみから立ち直れず自らを見失ってしまう、そんな人への言葉が〈お墓の前で泣かないで、そこに私はいません〉なのだと私なりに受け止めた。同時に墓は自分もやがて納まる所としての安心の拠り所でもあり、ゆえに自分がこれから生きて行く方向性を見つめる場でもある。今夏いただいたアンケートに、こうした話題に関連しそうないくつかの回答があったのでご紹介したい。

「この角田山のふもとに来ますと心が落ち着きます。

お寺のお庭等を散策して帰路につきます。気持ちのなかに重いものを抱えるたびに、ここへ来て気持ちを軽くして帰ります。」「昨年の晩夏、都会で暮らす孫たちを連れて杜の安穏に立ち寄ったとき、涼風の中を沢山のトンボが飛び交っていた。無心に遊びまわる姿が心に残ります。いつか私たちが眠る墓の回りを次世代の子供たちが・・・と、楽しい想像をしてしまいました。」「宗教とは無縁と思っていた私が安穏廟と出会ってから、その考えが少々変ってきたような気がする。墓は死後のものと思っていたが、生前に私たちの思いを墓碑に刻み、しかも自然に恵まれた静かな環境の下に近代的な墳墓を幾度となく訪れ、そして本堂に礼拝することで私は人生への達成感、安心感、自己の証を肌で感じ取ることができるのである」

墓では死の現実を通して人生の無常を感じ、しかし終わりのない生の繋がりを理解するなかで生きる勇気をもらい、そして生きとし生けるものへの慈しみの心をはぐくむ。これは仏さまの、寺からのメッセージのひとつでもある。「千の風になって」の心も墓に寄せる想いも同じであることが整理できた。

尼僧物語

小川英爾

市民の立場でよりよい死の迎え方と葬送を考える「エンディングセンター」という市民団体があります。妙光寺も法人会員として加入していますが、そこの機関紙に連載を書かせてもらっています。そこに最近書いた第四回目が好評で、話題にさせていただいたご住職からも喜ばれて「コピーして檀家に配った」そうです。その全文を掲載します。（文中の声明はしょうみょうと読み、法要でお経に節をつけて唱える仏教の声楽です）

十年余り前のある日のこと、境内で掃除をしていた私は声を掛けられた。幼い子供の手を引いた、三十過ぎくらいの女性だ。「人に勧められてこちらのお寺を訪ねたんですが、話を聞いていただけませんか」という。目が輝いて明るい感じの印象があり、ときどきある深刻な悩みを抱えて相談に来た人、という感じではなかった。なかに案内してお茶を勧めながら話を聞いた。

「夫の転勤で新潟に来たんですが、以前住んでいた千葉でお寺が近かったからよくお経を聞きに行きました。こちらに来てからその機会がなくて寂しいものですから、差し支えな

ければ毎朝伺ってもよろしいでしょうか」そんな話だった。しかし聞けば女性の家からここまで車で三十分はかかる。それに当時私がことのほか多忙で、朝のお勤めの時間も一定でなかったりさぼることもあったりして、来られても無駄足になることもままある。その事情を伝えて、女性の家から近い市内のお寺のI住職を紹介した。

そこは小さな寺だが住職がなかなかの人物なのだ。檀家はなく、他の幾つかの大きな寺の檀家の月命日にお経を読んで歩くのを主な日課にしている。檀家を持たないぶん身軽だから、一日の予定が終われば夕方前から酒を飲むというのが月の大半をしめ、飲み屋の支払が多い分貯金もない。行動も風貌も破天荒なうえ大らかな人柄で、近頃の世間のチマチマした住職のイメージの逆を行くから、僧侶の世界に敵は多いが一般世間にはファンが多い。実は本当は気が小さくて人情家で世話好きな優しい性格の持ち主なのだ。私が卒業と同時に父亡き後の妙光寺に入り、右も左もわからないときから「あんたのお父さんには世話になった」と支えてくれ、夜の街にも誘ってもらっては楽しい酒を沢山ご馳走になった、恩ある先輩でもある。

この寺にかの女性が訪ねて、毎朝のお勤めに参加することになった。I住職の夕方前から深夜まで酒を飲む生活は変らなかったが、朝五時の本堂でのお勤めはどんな二日酔いでも欠かすことがなくなった。I住職いわく「何が変ったって、これまで朝の遅かった女房が本堂に来てお勤めに参加するんだよね。若い女性が来るからって、なんか勘違いして心配してるみたい」と。心配したのは奥さんだけでなかった。市内の他の寺の住職たちが、噂話の格好の種にしたのだ。そんなことなどまったく気にしないI住職、他の寺に出かけるときに運転してもらい安心して酒を飲むなど、女性は高僧に仕える信者に見えなくもなかった。

その後I住職はこの小さな寺を息子に任せ、自身は父親が引退した別の市の大きな寺の住職に就いた。その際奥さんが元の寺に残り、女性が大きな寺の裏方を勤めるようになった。その後間もなく得度して、本格的に尼僧を目指すことになったようだ。プライベートなことゆえ女性の家族について改めて尋ねることもはばかられたし、移られた寺が妙光寺から遠くなったため私とI住職とが杯を酌み交わす機会もなくなり、詳しい話はいまだに知らない。

それが今年の春先、I住職が厳寒期百日間の荒行を終えて寺に戻る式が行われ、招かれて行った私はびっくりした。かの女性がきれいに剃髪して見事に袈裟衣をまとい、立派な尼僧になっていたのだ。始めは本人とは思えず、挨拶されるまで半信半疑だった。さらに多数の来賓僧侶、本堂一杯の檀家の人たちの前で法要の中心を勤めたのだが、それが澄んだ実にいい声で読経をリードしたからさらに驚いた。しかし表には出さないものの、来賓僧侶たちの反応は決してよくはなかった。男性でも難しい声明師という資格を得たというのにだ。いつか機会をみて妙光寺に呼んで上げたいと思いつつ戻って

きた。

そしてこの十月三日、妙光寺に伝わる築二百年近いといわれる三重塔が破損したのを、篤信者の寄進で解体修理が完成し、お祝いの法要を営んだ。そこにI住職と尼僧を招いた。お願いの電話に「彼女、檀家には評判よくて、法事でも住職は来なくていいから尼さんだけでいいなんて言われることもあるんだ。でも他のお寺から呼んでもらえなくて。喜ぶよ。お布施なしでいいからな」と、I住職。予想通り、ひときわ響きのいい妙光寺の本堂に、澄んだ声が歌でいうとソロで尼僧の声明が流れた。「こういう形で妙光寺さんに伺えて嬉しく、とっても緊張しました」と、法要後紅潮した顔で話してくれた。やはり法要に出た私の後輩で鎌倉のM住職は「来年のうちの法要にもお呼びしたいですね。慣れきった近所の住職たちとの法要に刺激になります」と。また後日、出席した妙光寺の檀家のおばさんからは「あの尼さん声もいいし、すごく素敵だった。どうして法要のときだけしか出てきてくれなかったの。私握手したかったのに」と言われた。

さらに妻からは「あんな素敵な尼僧さんになれるのにどうして、あなたが育てなくてIご住職に回したの。人を見る目がないわね」と言われる始末。「あの時点ではどうしようもなかったんだ。でも今またひとり、尼さんになりたいという人がいるよ」と、弁解と同時に嘘ではない話でその場を取り繕うとした私に「そう、男の坊さんはもう駄目。尼さんを育てて、妙光寺も尼寺にしましょう」と、妻の勢いは止まらなかった。

確かに安穏廟を求めた方のお孫さんで東京に暮らす女性から、今まだ小学生の子供に手がかからなくなったらお寺に行っていいですか、と言われている。新潟に生まれ育ち幼い頃から祖父母を介してお経が好きで、哲学を専攻した大学を出産で中退。現在一人で働きながら子供二人を育てて、さらに大学に復学して先ごろ卒業したと言う頑張りやさんだ。

すっかり世襲化してしまったお寺の世界に、こうした元気のいい若者、しかも女性が現れることはとても嬉しい。とかく世間から批判されることの多い昨今の寺だが、こんなふうに宗教をとらえてくれる人もいるのはまだまだ捨てたものではないとも思う。妙光寺の次期住職候補は一般公募すると公言して、具体化の準備も始めている。それを聞いた檀徒の高齢者は一様に本気にしないが、三十代後半の檀徒は「それは面白い、僕が二十代だったら応募します。きっとたくさん応募がありますよ」と言ってくれた。我が家の大学二年生の長女にまで「私は遠慮するけど、とっても面白いし、今の若者ならきっといっぱいくるよ」と言われた。もちろん公募するからには性別、国籍で制限するするつもりはない。

ただ心配は男性の僧侶ならまだしも、I住職のように飄々としながら立派な尼僧さんを育てる力量が私自身にあるのか、それが問題なのだ。

信心

祖母と母から引き継いで

石田照三さん（七十二才）
ユキ子さん（六十六才）

照三さんは二人の妹以外、姉は新潟市内で日蓮宗の檀家に嫁ぎ、同じ市内に住む二人の弟も先ごろ妙光寺の檀徒になった。それはみな祖母と母サダさんの影響かもしれない。

祖父の死後、後妻だった祖母は家から離れて二人の娘を女手で育てながら生家の菩提寺である妙光寺によくお参りした。下の娘のサダさんが新潟に出て髪結いに弟子入りし、ひとり立ちして母を呼び寄せやがて結婚して照三さん他八人の子供を生んだ。サダさんも信仰熱心で、市内のお寺はしょっちゅう、妙光寺へは春夏季節ごとに子供たちを引き連れてのお参りを欠かさなかった。「当時お寺までは新潟からバスで行き、降りてから片道二時間近くは歩いた。途中春は一面の桃の花がきれいで、夏は畑で買って食べる西瓜が最高においしく、子供心にお寺参りは楽しみだった」と照三さんは懐かしむ。

サダさんは大事にしていた母親の写真の裏に思い出を綴っていた。「いつも云ってくれる言葉は母親一人で育てたから、ワガママだと人に云われぬようと気をつけれと。りっぱな母であった。四十五歳で夫に死別して姉と私、二人の子供を育てて下さった。」わがままどころかかサダさんは世話好きで子供の学校のこと、市内で檀家が集まる講中のことを先頭になって勤め、現住職が十歳のころお盆のお経回りの手伝いで新潟市内に行かされると、照三さんの運転する軽自動車でサダさんが道案内をしてくれるなど、人のために喜んで尽くした人だった。

サダさん亡き後はユキ子さんが講中に入ってお経を覚え、照三さんは独習で覚えた。いまは二人で読書と照三さんはさらに陶芸を趣味に年金暮らしの毎日で、妙光寺の行事参拝を欠かさず今年は夫婦して授戒で戒名も受けた。そのユキ子さん「実家は浄土真宗だったけど日蓮宗のお経がとてもなじみやすかった。今は講中も消滅して私はお寺参りのときくらいだけど、主人は毎朝のお経を欠かさないで感心しています」と言う。

先ごろサダさんの三十三回忌と父由七さんの二十七回忌を兄弟夫婦が揃って妙光寺で営み、昔話に花が咲いた。

中越地震

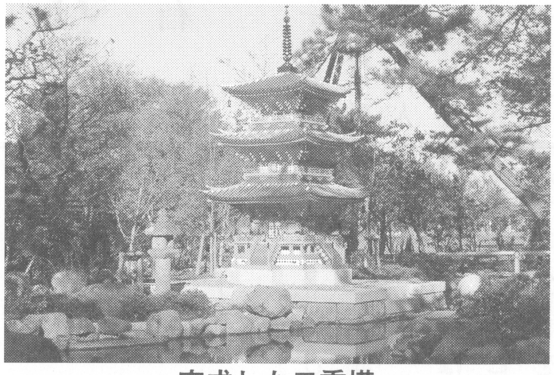
このたびの地震で被災された方々、また不安な日々をお過ごしの皆様に心からお見舞い申し上げます。被災地域の全ての会員の方々に連絡を申し上げてはいませんが、とくに被害の激しかった地域の方のご無事は確認とれました。迅速にご支援申し上げる態勢にありませんので、今後少しでもお力になれるよう検討してまいります。寒さに向かう折りからくれぐれもご自愛くださいますように。

妙光寺は震源地から離れているのと地盤がいいようで、周辺地域も含めて被害はまったくありません。ご心配いただきお礼申し上げます。

御会式（おえしき）と「三重塔」落慶法要

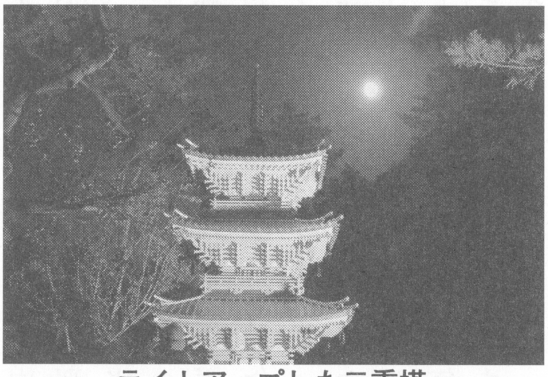
十月三日午前に日蓮聖人のご命日の法要である御会式と、檀信徒に戒名をお授けする受戒会、そして午後から三重塔の修復落成の記念行事を行いました。

今回の授戒希望者は十四名おられ、そのうち当日出席された方が九名で、とりあえず今回は研修だけ参加という方が一名でした。午前九時から一時間半、数珠の持ち方から仏教と日蓮宗の基本、妙光寺のことなどを研修していただきました。引き続いて日蓮聖人第七二三回忌にあたる御会式法要を百五十名程の出席のもと本堂でお勤めし、そのなかで授戒を行いました。



完成した三重塔

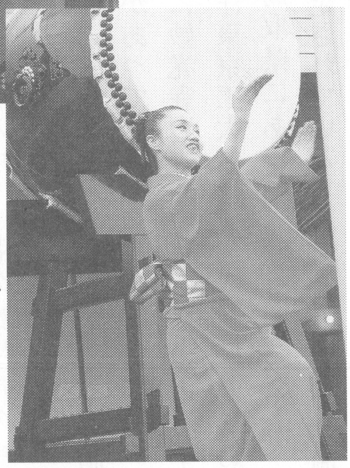
お斎の準備の都合上事前に出席申込みをお願いしたのですが、ご案内が遅かったせいもあり当日まで申込みが続いて混乱しました。ことにお斎は手作りで前日から仕込み、当日早朝から割前地区の奥さんたちを中心に七人で準備したのですが結局数が足らず、受付け等のお手伝いいただいた世話人の数人が辞退されて昼食ぬきになったようです。



ライトアップした三重塔

山崎完一氏の記念講演

雨のため院庭にテントを張った音楽法要



「花結」の踊り

山口さんの笛

読　経

鼓童の太鼓

にぎやかに鏡開き

大黒様に扮した小黒さん

三重塔落慶記念式典では工事関係者、地域の人たち等々で、二六〇人ほどに人数が増えました。最初に工事の監修をお願いした文化財建築の専門家で山崎完一さんが、新潟県内にある塔と比較しながら妙光寺の三重塔の特徴を解説されました。山崎さんとは二十五年前の客殿工事でご縁があって以来のお付き合いです。さらに妙光寺の一連の建築に関わる茶谷正洋東京工大名誉教授の奥様の実家が鳥取県にあって、それが登録文化財指定されている旧家で山崎さんはそこの運営理事だそうです。また、妙光寺の造園に長年関わる野澤清先生とは岩手県の旧家の保存で一緒に仕事をされています。これらはすべて偶然という不思議なご縁で、その話から始まりました。

この日は雨が降ったり止んだりのあいにくの天候で、塔の前に会場を準備したのですが結局本堂前の院庭にテントを張って行いました。一時間半の前半を「鼓童」の太鼓と笛に華やかでにぎやかな「花結」の踊り、後半に三重塔の修復完成を仏様に報告する法要を営みました。最後に修復費用を奉納された小黒トメさんが大黒様の衣装で縁起物の飴を皆さんに配り、住職が参列者の掛け声の中で「鏡割り」をし、「鼓童」のメンバーがアンコールでみごとな「木遣り唄」を披露して締めくくりました。

「鼓童」は五十人のメンバーがいて交代で日本各地や海外で公演活動しているそうですが、今回はベテランのトップメンバーが揃いました。しかも二日前から妙光寺に宿泊して何度もリハーサルを重ねての演奏でしたから、出席された皆さんが口々に感動の言葉を残して帰り、文字通りの盛会でした。この様子を「新潟日報」紙が、また事前の塔を建てる様子を「新潟総合テレビ」がニュースでそれぞれ報道したせいもありずっと見学の人が絶えません。あざやかな朱色の塔が新たに作った池の水面に写るなど、想像していた以上に境内の風景が大きく変りました。大晦日の除夜の鐘ではライトアップもご覧いただけますので、ぜひお出かけください。

「花結 角田山妙光寺・三重塔落慶法要に出演」

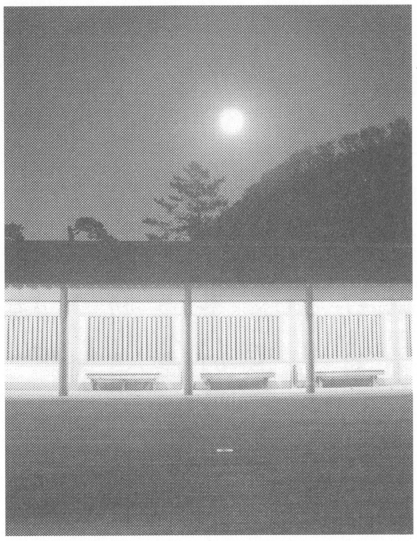
『鼓童通信二〇〇四年十月号』より一部抜粋

野外公演の予定で、前夜ライトアップされた会場は水面に影を落とす朱塗りの三重塔に、舞台となる山門の正面に本堂が建つ、神秘的で素敵な空間でした。ところが当日は朝から怪しい雲行き。外で準備を始めた途端、ザーッと大雨が。その後も降り続け、結局、境内に白いテントを張り、その下でやることになりました。突然の会場移動にてんやわんやでしたが、何とか開演に

こぎつけました。主催者の妙光寺ご住職は楽しい方で、舞台の最後に踊るカチャーシーでは吉利と一緒に登場。新しいコンビができました。・・・・

満月と境内

三重塔と月のとりあわせの写真を前号で掲載しましたが、あれは合成写真です。十一月初旬のある夜、雲ひとつない空に満月が登ったのでもしかしてとカメラを向けたらぴったり納まりました。もっといいカメラで照明を準備して撮れたらいいのですが、季節と天候が一致するこんなチャンスはまずありません。興奮しました。インターネットのホームページにはカラーで紹介していますし、ご希望の方にははがきに印刷してお送りします。



水害義援金報告

皆様にご協力いただきました水害義援金ですが、最終的に妙光寺拠出分を合わせて二〇〇万円とし、半分を被災された檀信徒、安穏会員の方々に直接お届けしました。仮設住宅に暮らす方、ようやく復旧工事が終わったという方、一時は二メートル近い水に浸かったというお宅もあり、感謝のお気持ちで受け取っていただきました。もう半分を建物のほとんどが流された妙栄寺と、日蓮宗新潟東部宗務所を経由して行政にお渡ししました。妙栄寺はすぐ裏の堤防が決壊したことによる水害でしたが、その堤防の改修工事を抜本的に行うため移転させられる方向で事態が推移しているそうです。

Sさんからの手紙「この度の水害によって生活環境が一変し、生命さえも脅かされる日々を主人と共に切り抜けてこられましたのも、ひとえに皆々様のお力と深い愛情によって支えられたおかげです。ただただ感謝の念で一杯でございます。お蔭様で今は仮設住宅にて静かな日々を過ごして居ります。（中略）身に余る義援金を頂きましたこと心より感謝しお受けいたします。誠にありがとう御座いました。紙上を持ちまして皆々様方に厚く御礼申し上げます」

Hさんからの手紙「昨日は遠い所わざわざ来てくださり多大なるお見舞いをいただき心からお礼申し上げます。またご前様に来ていただきお仏壇にありがたいお経を上げていただき喜んでいます。今は余震に悩まされておりますが仏様にお参りして頑張って行きたいと思っております。檀家様、安穏会員様の皆様によろしくお伝えください」

引き続き地震被害へのご協力をいただきたく、別紙お願いさせていただきます。

蓮池寺務担当が退任

増えた事務と来客への対応として役員会で新たに寺(事)務担当者の選任を決め、六月から蓮池さんをお願いしてきました。しかしご本人の都合で三重塔落慶法要が終わるまでということで、十月中旬をもって退任されました。ソフトで誠実な受付け応対からパソコンを駆使しての事務処理までこなし、本当に助かりましたし皆さんからの信頼もいただきました。佐渡島でトキを野生に戻すプロジェクトの事務局長としての仕事が待っているそうで、無理に引き止めることもできません。ご本人からは「佐渡の仕事が先に決まっていなければずっと妙光寺にいたい気持ちはあります。これからは都合つく限りボランティアでお手伝いにあがりますから、いつでも声をかけてください」と言っていただきました。

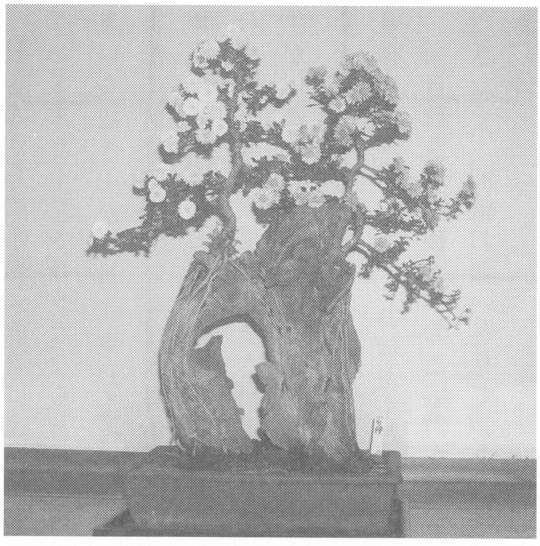
後任については限られた予算で適任者を見つけるのが大変ですが、「妙光寺の実績と構想に共感したからいい人材を見つけ出すお手伝いをしたい」という人が現れました。現在進展しており次号にはいいご報告ができるかもしれません。

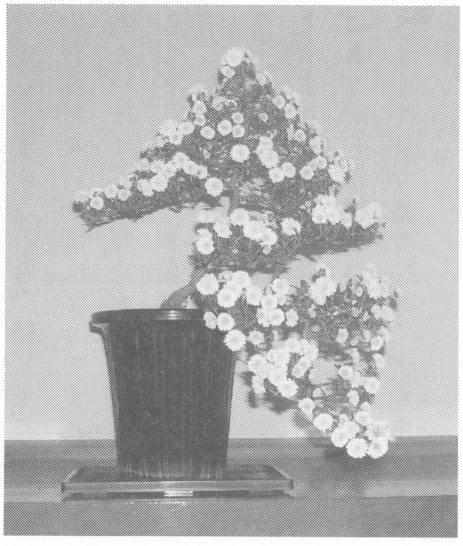
新規墓地の残りわずか

わずかづつですが新規に希望する方があって、現在普通サイズでお分けしている墓地の区画がなくなります。新たに土地を求めて造成するほどでもないので、題目堂前の大形サイズの墓地を普通サイズに区割りし直して対応することを検討します。

菊花展示

秋の恒例、今年も巻町の内藤清さんが丹精込めた菊の花を展示奉納くださいました。可憐な菊花が古木に根を張る姿に、玄関を訪れる人たちは感嘆の声をあげて見入っています。今秋は暖かい日が続いたせいあって三重塔目当てに来る人が多く、例年以上に玄関がにぎやかでした。菊花といえば弥彦神社が有名ですが、最近は若い後継者が少なくて菊作りを楽しむ人が激減していると話していかれました。時の移ろいを感じます。





「妙光寺特番」テレビ放送日決定

昨年夏から収録してきた妙光寺のテレビ番組がいよいよ放送になります。きっかけは三重塔の修復工事を記録する番組を作ってはどうか、という放送局からの話を役員会議で相談したところ、国宝級ならまだしも三重塔だけの内容では社会性がない。作るなら妙光寺の今を伝え内容にして、その中に三重塔修復も位置づける方がいいのではないかとなりました。

製作会社と再三再四協議を重ね、安穏廟で全国に知られるようになった妙光寺がこれまでやってきたことと現状、そしてこれからを考える内容で進めてきました。寺の由来、水害に苦しめられた歴史、客殿建て替え、墓の承継問題に始まった安穏廟とその展開、本堂建て替え、四菩薩像開眼、フェスティバル安穏、季節の行事と風景、檀信徒と安穏会員の声、三重塔、これからの課題等々。とても三十分では納まらなくなり一時間になりました。民放ですからスポンサーに本堂、三重塔工事を担当された㈱加賀田組さんの全面的なご協力をいただきました。

ただし新潟県内だけの放送です。ご希望の方にはビデオテープをお分けします。お名前、郵便番号、ご住所を忘れずに記入して送料込みで二千円を妙光寺にお送りください。とりあえず先着百本で締め切ります。（この金額で可能かどうかはっきりしていないのですが、事務処理の便宜上のこともあり直接手渡しの方も同額にしていただくことで納めたいと考えています。このテープは番組制作会社が、CMを抜き化粧箱に入れて保存用に作るもので、ご自宅で録画するより高画質です。県内の方で保存しておきたいとお考えの方にもお薦めです）

『変る家族と墓のゆくえ　～角田山妙光寺の試み～』
12月11日（土）　午前10時30分～11時30分
ＮＳＴ新潟総合テレビ

事件、災害等が発生すると放送日が変更になる場合があります。その際は妙光寺にお問い合わせください。

お寺に宿泊してミニ修行体験はいかがですか

妙光寺に泊まってみたい、お経を覚えて一緒に唱えたい、仏教や日蓮宗のことについて少しは知りたい、授戒を考えてるけど中身を知ってからにしたい、住職とゆっくり話したい相談したい、でも交通が不便でなかなかおっくうだ。なんて方が少なからずおられるやに聞いています。

そこで一泊二日のミニ修行道場を試みに開きます。希望者が多ければ回数を増やし、さらに中級、上級コース、できれば子供向けも考えます。詳細は左記の予定ですが、計画中のゆえ変更もあります。ご高齢、お身体の状態は考慮しますのでお申し出ください。

『一泊二日・初めての参籠修行』

（参籠〈さんろう〉はお寺に泊まることを言います）

期　日　一回目　平成十七年
三月二十六(土)・二十七(日)日
五月・日取りは未定

対　象　妙光寺の檀信徒、安穏会員

定　員　各回十五名（定員になり次第締め切り）

費　用　一人一万三千円（一泊二食、寝具、写経用品を含む。必要品は参加者に通知します）

申　込　参加者氏名と年齢を添えて妙光寺まで
（問い合わせもぞうど）

日　程　**一日目**　午後開会　講義、実習（教え、お経、作法）、夕食後に法座（車座での語り合い）、自由交流

二日目　朝のお勤め（岩屋、本堂）、作務（掃除等）、写経、瞑想、まとめ、三重塔納経法要、閉会、昼前解散

希望者は午後に個別相談

あんのんのページ

課題の進捗状況

皆さんの要望に対して、やります、検討中などと毎回お伝えしながらなかなか形にならないことが多くなっていることを申し訳なく思っています。言い訳ですが専従で担当する人手と費用の見通しが問題で、大きく前進しないのが実情です。こうしたサービスをうたう業者やＮＰＯが最近増えていますが、一方で消滅しているところも出ています。お寺は責任と永続性が大切で、始めたら安易にやめられないために慎重にならざるを得ないのです。今回は個々の課題の進捗状況をお知らせします。

生前契約　自分が亡くなったとき当てにできる親族がいないので、簡素でいいから妙光寺が葬儀・埋葬の執行を引き受けて欲しいとの声があります。これは遺言書がなくても委任状に基づいた簡単な契約書で可能です。ただし遺体の搬送と安置、葬儀の形式、会場、通知、残務処理の程度、総体費用の見積もり、支払方法、残金処理方法等々の事務的な取り決めが必要です。早めの十分な個別相談が大切で、そのうえでの受付を開始しました。

一般的な葬儀　喪主は親族がやるので法要を他の僧侶でなく妙光寺に依頼したい。でも遠いし斎場を使うけど来てもらえるか、との声があります。現状でもお受けしており、新潟県内はもとより全国どこでも伺います。住職の日程の都合がつかないときは、信頼できるお近くのお寺に妙光寺が責任を持って依頼します。今年の七月、関東のお盆中だったので横浜のＮさんの場合は鎌倉の、北海道Ｈさんの場合は帯広市のご住職をそれぞれお願いしました。いずれにせよ必ず葬儀社と相談する前に妙光寺に連絡されることと、できれば事前にその意思をお伝えいただけるとなおよろしいでしょう。

もしものときの手引き　葬儀も含めてお寺との関わり方、あるいは無宗教葬を考えていてもその後の納骨や供養（無宗教葬の場合は供養とは言わないのですが、位牌が欲しいとか色々悩む方が多いようです）、親戚との関わり方等々わからないという方が増えています。従来からの檀信徒でも世代交代が進み状況は同じです。そのためこうした手引書を作成したい考えはありますが、人手と経費の問題で停滞しています。

成年後見　病気や痴呆になったときに頼れる親族等がいない場合、入院や手術の保証人とか日常の金銭管理、その後の財産処分等の問題が発生します。これを法律に基づいて第三者が担う制度が成年後見です。これを妙光寺に相

談される方があり検討していますが、身体介護から財産問題まで関わる重大な責任が生じますので、現時点では信頼できる弁護士をご紹介し引き続き相談にのっています。

個別訪問　ひとりひとりに人生の歴史があり、それぞれが不安を抱えて生きています。こうした日常や人生の終末期を単に制度や契約だけで片付けることはできません。また葬儀や埋葬だって形だけ整えればいいというわけにはいきません。

そこで住職が個別にお伺いしてお話しをさせていただき、必要に応じてご相談にのっています。順番を決めているわけでなく機会をみては県内外を歩いており、最近は水害被災の方、テレビ収録にご協力いただく方と続きました。いろんなお話しが聞けてとても勉強になりますので、訪問行脚（ほうもんあんぎゃ）と名づけました。ご要望があれば優先して伺いますのでお知らせください。

ペットのお墓　約束して遺骨を預かっている方もありますが、いまだにできていません。概略で設計図も位置も決まっているのですが、納得いく形の自然石が見つからないということで工事業者と話しが煮詰まらないのが理由です。

フェスティバル安穏　今年第十五回目を数えてすっかり定着し、参加者もスタッフも毎年楽しみにしています。キリスト教の牧師さんまで興味を持って参加されたとの話を最近耳にしましたが、それほど社会的な広がりもあるようです。これまでずっと妙光寺が経費持ち出しで運営していますが、参加人数が増えて持ち出し金額が年々減少しており事務局も助かっています。より一層有意義な場となるよう努力します。

あそこにも「妙の光」を　会員の高齢化と世代交代が進み、次の世代に妙光寺の情報がきちんと伝わっていない例が見受けられます。そこで会員本人以外の関係者にも「妙の光」を送る案を検討しています。発送先名簿をコンピューターに入力する作業と送付費用が現在の課題です。

もっとお寺で　もっと気軽に妙光寺に行きたい、お経を覚えたい等々の声があり大変ありがたいことです。ただ通常の行事では参加しにくいとの声もあり、これは若い檀信徒からも聞きます。通常の行事も出席者が高齢化して減少する一方で、抜本的な見直しが必要な時期に来ています。そこで今回最初の試みとしてご案内のように『一泊二日・始めての参籠修行』を企画しました。様子を見ながら順次計画し、気軽に大勢人が集まるお寺にしていきたいと考えています。

寺(事)務担当者　前記の課題に対処するためにも専従の人手が必要で、「寺の動き」のページでお知らせのように現在鋭意選考中です。これが軌道に乗れば課題解決がもっと速やかになります。

寺庭から

「地球人になりたい」

小川　なぎさ

身近なところで水害、地震とこうも立て続けに非常事態がおこると、毎日普通の暮らしをしていることが申し訳ないような気がしてくる。

先週東京、仙台と回ってきた。どこの町にも募金箱が置かれ、仙台の地元紙河北新報には毎日多くの人々から寄せられている義援金の記事が載っていた。日本の国民の多くの心配が被災地の皆さんにすでにたくさんとどいているのだろうな、と思う。どうぞ復興の日まで頑張ってくださいと、ただ祈るしか出来ないが。

先日安穏フェスティバルに何度か参加しているマークさんが妙光寺を訪れた。その折にお聞きした話。

彼のお母さんはアメリカ人、お父さんはイギリス人。二人はイランで知り合いカナダで結婚した。そして彼が生まれた。彼は3つの国籍を持つのだという。マークさん自身も日本で今の奥さんと知り合い結婚。二人の間にうまれたお子さんも3つの国籍を持つそうだ。

世界中で国際結婚がどんどん増えれば戦争なんてなくなるかもしれないね！という話をしていた。確かに人間が一人で複数の国籍を持つことが当たり前になり、世界が混ざり合ってお互いに理解しあえれば、平和な地球も夢ではないかもと彼の話を聞いていて思った。

実際コンピューターのネット上では世界の国々はとても身近にある。外国のお店へ注文すれば買い物だってできる。この前は洋服が一週間で届いた。娘は友人とまるで電話のようにメールのやりとりをしているし、海外のニュースも同時に見ることができる。

先の地震のときもすぐにいろいろな情報を掲載する場所がコンピュータの番組にできて、マスコミやテレビにはでない小さな情報がたくさん全国から寄せられていた。私も親戚があるものだからそれで随分安心できたことがあった。

天災は防ぎようがないかもしれない。でも戦争はいつか人間の知恵で無くしたい。私にはもう国際結婚は無理だけれど、毎日見ているコンピュータの画面上では世界の国々と国内の距離感はたいして変わらないと、地球は狭いなあと実感することを大切にしたいと思う。

行事案内

お札配り

十二月に入って住職と鎌田が手分けして来年のお札を届けながら、県内檀信徒宅をお経に伺っています。事前連絡が難しいので、電話いただければご都合に合わせて伺います。

大晦日、除夜の鐘

大晦日十時半から本堂で除夜法要。引き続き十一時四十分ころから除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に撞いていただき、縁起物が当たる抽選もあります。境内では三重塔をライトアップし、古いお札や仏具を燃やす「お焚きあげ」もしますのでお持ちください。

元旦、年始参り

元旦と二日の朝九時から午後四時まで、ご年始の受付けをしています。新年は本堂のお参りから始めましょう。

年回忌のお知らせ

平成十七年に年回忌のあるお宅へは直接お知らせします。届かないお宅は法事が当たっていないということです。

星祭祈願

一年間の家内安全、健康、幸運を祈願する『星祭り』は一軒二千円です。新規希望の方のみ、家族全員の氏名、性別、生年を書いてお申込みください。元旦の法要で祈願の上、家族ごとにひとりひとりの星を記入したお札を差し上げています。

位牌堂への位牌安置と命日のご回向

本堂脇の位牌堂に申込みされたお宅の位牌を安置して、毎朝の法要でその日が月命日当たる精霊のご回向をします。費用は年間一万二千円。継続の方は十七年度分を三月までにお願いします。妙光寺の永代供養料とは、この三十年間分（三十万円）からとしています。

あとがき

水害、台風、地震と、特に新潟県にとって災害の多い年でした。先日伺ったお宅の中には水害と地震の両方で避難所暮らしをされた方がありました。被災された方々の一日でも早い復興を願わずにはいられません。

近頃犬の散歩で海岸を歩くと、台風で川から流れ出たおびただしい量の流木が流れ着いています。薪ストーブに使ったら何十年分もありそうです。妙光寺では仮に電気水道が止まっても（ガスはプロパン）、薪になるこうした流木や山の枯れ木があるし、きれいな水は境内を流れ、明かりのロウソクに不自由することもありません。子供のころ畑を手伝い薪割りも水汲みもやりましたから、ガス水道電気に頼り切った今の生活がもったいなく感じることがあります。あのころのあんな暮らしがしたいな、なんてふと思うのは歳のせいばかりではないように思います。

私事ですが来春高校を卒業する末で三、四女の双子の進学先も決まり、家族皆元気です。来年が少しでもいい年になることを願って新しい歳を迎えましょう。（小川）